

平成25年度「全国学力・学習状況調査」検証シート

大 阪 市 立 北 中 道 小 学 校

児童数

38

平均正答率（％）

	国語A	国語B	算数A	算数B
学校	74.7	54.7	83	65.6
大阪市	59.1	46.6	75.9	56.4
全国	62.7	49.4	77.2	58.4

平均無解答率（％）

	国語A	国語B	算数A	算数B
学校	1.5	7.4	1.5	1.6
大阪市	11.5	14.2	1.9	6.5
全国	10.7	13.6	1.7	6.3

結果の概要

平均正答率は、国語、算数ともにA問題（身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能など（主として「知識」に関する問題）を中心とした出題）、B問題（知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などにかかわる内容（主として「活用」に関する問題）を中心とした出題）ともに全国平均を上回っていた。無答率についても、国語、算数ともに、全国平均より低いポイントになっている。

これまでの取組の成果と今後取り組むべき課題

国語においては、本校の研究教科に設定し、「書く活動を通して自分の思いや考えを表現できる子どもを育てる」ことを目標に取り組みを進めている。また、図書ボランティアの方に各学年へ読み聞かせを実施してもらったり、図書室、学級文庫の蔵書の充実を図ったりして、児童が本に触れ合う機会を積極的に作ってきた。このため、本校の児童は、今回の児童質問紙でも「読書は好きですか」の問いに高い割合で好きと答えている。「学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しいと思いますか」の問いには、難しいと思っている児童については低い割合を示している。「読書が好き」で、「自分の考えを人に説明したり、文章に書いたりすることを苦に思わない」という傾向が顕著であることから、本校の国語科に関する今までの取り組みの成果が表れていると言える。しかしながら、国語科Aにおいては、74.7ポイント取得しているが、活用を主とした国語科Bでは、54.7ポイントの取得になっている。ともに、全国平均・大阪市平均を大きく上回る数値であるが、国語科AとBの取得ポイントの差を全国・大阪市と比較したとき、本校はその差が大きい。このことから、「国語科における知識・理解はかなりの高い水準で達成できているものの、知識等を活用する能力（思考力、判断力、表現力など）については、その水準までには到達していない」ということが分かる。即ち、国語科における、今回の調査で判明した本校の今後取り組むべき課題としては、知識・理解にかかる取り組みを継続して行っていくことと、知識等を活用する能力（思考力、判断力、表現力など）を一層身につける取り組みを行う必要があるということが明らかである。このことは、無回答率が、国語科Aに比して、国語科Bにおいては5倍になっていることから言うことができる。

算数科においては、習熟度別少人数授業を実施し、各児童の習熟度に合った学習の場を設定した。理解しやすい授業の実践により、基礎基本の定着が図られた。また、計算等の基本的な学習は、繰り返し取り組むことが大切であることから、学習プリントを整備し、学習のふりかえりや宿題を通して継続して取り組みを進めていった。これらの取り組みの成果が表れてきていると言える。しかし、B問題において、全国・大阪市平均は上回っているものの、A問題の平均値との差が17.4ポイントと隔たりがあった。知識等を活用する能力（思考力、判断力、表現力など）が一層身につく取り組みを国語科同様に行う必要がある。

児童質問紙において、国語、算数ともに、「勉強が好き」、「授業の内容がよくわかる」、の項目に対して、全国平均よりも高い値で、「当てはまる」と答える児童が見られた。学習に対する関心意欲が高く、家庭においても宿題をきちんと行うなど、学習しようとする姿勢が見られる。一方で、得点分布において、特にB問題では、高得点の児童とそうでない児童の2極化が見られる。得点の低い児童に対する底上げが、今後の課題として挙げられる。